

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 22 日現在

機関番号：24301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580027

研究課題名(和文) イタリア南西部の民俗的ポリフォニック・コーラスに関する音響身体論的研究

研究課題名(英文) A Study on Acoustic Body of Folk Polyphonic Chorus in the Southwestern Italy

研究代表者

山田 陽一 (YAMADA, YOICHI)

京都市立芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：80166743

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：イタリアのサルデーニャ島中部地域において、男性4人による無伴奏の多声部合唱(ア・テノーレもしくはア・クンコルドゥ)について、集中的な現地調査をおこなった。その結果、この合唱の特徴として、(1) 4人の声の並行、衝突、離反によって、ダイナミックなポリフォニーが生まれること、(2) 歌い手たちのそれぞれ特徴的な4種類の声、物理的に接近して輪になった身体の間で強く響きあうこと、(3) 彼らにとって、声を響きあわせることは根源的な身体的快楽をもたらすことなどが明らかとなった。これらの研究成果については、今年度中に出版予定の音響身体論に関する単行本の中の1章として、現在執筆を進めている。

研究成果の概要(英文)：I conducted intensive field research on unaccompanied multipart choral singing (called "a tenore" or "a concordu"), sung by four men in the central region of Sardinia Island, Italy. As a result of this work, the following features of the singing have become evident: (1) a dynamic polyphony is produced through the parallel, colliding, and contrary motions of the four men's voices; (2) characteristic voices of four kinds strongly resound with each other among the bodies standing close together in a circle; (3) making the voices resound fundamentally brings about bodily pleasure to the singers. The fruits of this field research are to be included as a chapter in my book on the acoustic body, which will be published within this academic year.

研究分野：民族音楽学

キーワード：多声部合唱 サルデーニャ ア・テノーレ ア・クンコルドゥ 音響身体論 民族音楽学 音楽人類学

1. 研究開始当初の背景

3~4声部からなるポリフォニック・コーラス(多声部合唱)がほぼ世界中に分布し、民俗的レベルで伝承されていることは、これまで多くの民族音楽学者の報告によって明らかにされてきた。本研究代表者も、パプアニューギニアやフランス領ニューカレドニア等での過去の調査研究において、けっしてソロで歌うことはなく、つねに多声部で声を響かせあう人びとの歌唱文化に数多く出会ってきた。

このことは、人間が「歌うこと」の歴史やその音楽的意味を考えるうえで、きわめて重要な視点を与えてくれる。すなわち、「モノフォニー」(単声音楽)から「ポリフォニー」(多声音楽)へ進化したという、一般に理解されている歌唱の歴史的展開は、じつは西ヨーロッパの教会音楽に代表される局地的かつ特殊なものであり、世界の多くの音楽文化において、歌唱はその原初のと時からポリフォニック(多声的)だったのではないかという視点である。この仮説を実証するために、本研究では、他地域とくらべて民俗的ポリフォニック・コーラスの分布密度が高く、そのため精度の高い比較研究が可能である一方で、これまで民族音楽学的な専門的調査が十分にはおこなわれていないイタリア南西部において、現地調査を実施することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、イタリア南西部各地におけるポリフォニック・コーラスの詳細で正確な分布状況の把握をはじめ、歌い手や聴き手たちがポリフォニーをどのように伝承しているのか、どのような「声の響きあい」を高く評価しているのか、彼らにとってポリフォニーを「歌うこと」や「聴くこと」はどのような経験であるのか、歌うときに彼らは身体をどのように意識しているのか、「響きあう声」は身体にどのような快楽をもたらすのか、といった問題を追究し、ポリフォニック・コーラスの実態解明を進めていくことにある。

人びとがポリフォニックに合唱するとき、人びとの歌声は、みずからの身体のみならず、ともに歌う人びとやそれを聴く人びとの身体とも共鳴しあっている。本研究代表者は、こうして音と響きあい、共鳴する身体のことを「音響的身体」と呼び、それをめぐる理論的考察を「音響身体論」と名づけ、身体的経験としての音響的経験、および音と響きあう身体の快楽に関する理論化・実証化を試みてきた(cf. 山田陽一「自然と文化をつなぐ声、そして身体——音響身体論へむけて」山田陽一(編)『自然の音・文化の音』昭和堂、2000年、pp. 191-217 / 山田陽一「音楽する身体の快楽」山田陽一(編)『音楽する身体』昭和堂、2008年、pp. 1-37)。

本研究は、この音響身体論という新しい理論をイタリアのポリフォニック・コーラスに適用することによって、音響身体論のさらな

る深化と汎用化をめざしている。音楽と身体の関係性という問題は、国内外の音楽学においても民族音楽学においても、(上記の山田陽一(編)『音楽する身体』をほとんど唯一の例外として)これまでほとんど正面切って論じられたことのないテーマであり、音響身体論自体もまだまだ発展途上にある理論である。ポリフォニック・コーラスの実践は、身体において響く声、ともに歌うものたちの声の響きあい、たがいに共鳴しあう身体、コーラスにおける間身体性、声を響きあわせることがもたらす身体的快楽など、音響身体論にとって本質的な様相を数多く含んでいるため、本研究の実施によって、音響身体論がいっそうの実証性とリアリティーを獲得することは疑いなく、それによって民族音楽学ならびに音楽学への大きな貢献が期待される。

3. 研究の方法

本研究では、イタリア南西部のサルデーニャ島において、3年間にわたり、ポリフォニック・コーラスの担い手たち(歌い手・聴き手・村落共同体の成員など)との直接的・集中的対話を積み重ね、同時にコーラスの音響映像ドキュメンテーションをおこなっていくことを基本的な方法とした。

当初の計画では、シチリア島においても現地調査をおこなう予定であったが、サルデーニャ島におけるポリフォニック・コーラスの密度の濃さ、すなわちコーラスが日常的におこなわれている村落の数の多さや、コーラス・グループの数の多さ、そしてポリフォニック・コーラスの村落ごとの違いやその音楽的多様性などが、1年目の調査において直ちに把握されたため、シチリア島における調査を取りやめ、3年間をサルデーニャ島での調査に集中させることにした。

2013年(1年目)の調査では、イタリア南西部(サルデーニャ島とシチリア島)のポリフォニック・コーラスに関する豊富な調査経験と広範な人的ネットワークをもつイグナツィオ・マキアレツァ教授(カリアリ大学人文部)の協力をえて、サルデーニャ島中西部に位置するサント・ルッスルジュを拠点にして、サルデーニャ島中部地方の西海岸から東海岸までを車で広範囲にまわり、ボザ、クリエリ、スカノ・モンティフェッロ、サント・ルッスルジュ、ポルティガリ、ヌオロ、ピッティ、イルゴリ、トルペの9町村において、歌い手たちへのインタビューやポリフォニック・コーラスの音響映像記録(デジタルビデオカメラによる約40時間の映像記録、PCMレコーダーによる約30時間の録音記録、およびデジタルカメラによる約400枚の写真記録)をおこなった。ちなみに、2013年度から2015年度まで3回におよぶ全調査において、サルデーニャ生まれで、カリアリ大学卒業後、ミラノ大学大学院で修士号を取得した、民族音楽学専攻のディエゴ・パニ氏に通訳(サル

デーニャ語（英語）スケジュール調整、アシスタント、運転手等を依頼した。彼自身も多声部合唱のすぐれた歌い手であり、コーラスについての造詣も深く、彼の参加は調査全体への多大な貢献となった。音響映像記録については、すべての記録の数十回におよぶ反復視聴をとおして、歌い手たちの声が個々の身体において響くすがたや、互いに響きあい共鳴しあう様子、身体と身体のあいだの関係性、歌い手たちの表情や身振り、声の調子などから伺える身体的快楽の発現について、詳細な分析をおこなった。

2014年（2年目）の調査では、2013年と同様に、サルデーニャ島中西部に位置するサント・ルッスルジュを拠点にして、ディエゴ・パニ氏のアシストのもと、ボザ、スカノ・モンティフェッロ、サント・ルッスルジュ、ボルティガリ、ヌオロ、ピッティの6町村において、歌い手たちへのインタビューやポリフォニック・コーラスの音響映像記録（デジタルビデオカメラによる約25時間の映像記録、PCMレコーダーによる約10時間の録音記録、およびデジタルカメラによる約350枚の写真記録）をおこなった。2014年度は、特にサント・ルッスルジュとボルティガリに調査の重点をおき、サント・ルッスルジュでは宗教的な多声部合唱のエキスパートであるス・ロザリウのメンバー（歌い手）たちとの長時間インタビューを実施し、ボルティガリでは聖母マリアの祝祭に参加して、数多くの多声部合唱に立ち会うとともに、本研究代表者自身も合唱に加わって、歌い手たちとの声の響きあいや、歌う身体と身体をつながりを実感することができた。この経験は、コーラスの音響映像記録の分析レベルを飛躍的に深化させ、自己と歌い手たちが共有する音響的身体の経験として、本研究の精度を増すためにきわめて有効であった。

2015年（3年目）の調査では、サルデーニャ島中西部に位置するボルティガリ村に焦点をしばり、毎年9月中旬に11日間にわたって催される聖母マリアの祝祭に関する現地調査をおこなった。音響映像記録としては、デジタルビデオカメラによる映像記録が約20時間、PCMレコーダーによる録音記録が約5時間、およびデジタルカメラによる写真記録が約200枚に及んだ。ボルティガリの聖母マリア祭は、村から約20km離れた山の中腹でおこなわれる。山には村人たちが寝泊まりできる小屋が約50軒あり、毎日夕方になると、何百人もの人びとが車に相乗りして山にやってくる。そして小さな教会で祈りを捧げ、共に食事をし、ワインを飲み、臨時にいくつかのコーラス・グループを組み、歌い、踊る。2015年度の調査では、この祭礼の来歴や成り立ち、社会的脈絡と意義、参加者たちの意識、儀礼のプロセス等に関する詳細な聞き込みをおこなうとともに、祭礼期間中に連日連夜、自然発生的に歌われる2種類の多声部合唱（宗教歌と世俗歌）における各声部の発声法

やコーラス全体の声の響かせあい、身体の間相互共振をはじめ、合唱メンバーの選びかたや、それに伴う合唱の評価などについても、分析的な参与調査をおこなった。

4. 研究成果

サルデーニャ島中部地域の多くの村で歌われているポリフォニック・コーラスは、男性4人による無伴奏のもので、世俗的な歌の脈絡および歌詞をもつものと、宗教的な脈絡と歌詞をもつものの2種類に大きく分けられ、前者は「ア・テノーレ」、後者は「ア・クンコルドゥ」とよばれることが多い。それぞれ名前のつけられた4声部（音域の低い声部から高い声部まで、順にバース、コントラ、ボーゲ、メサ・オーゲと呼ばれる）はそれぞれ一人の男性によって担当される。ア・テノーレの場合、ボーゲが歌の冒頭部で比較的長い独唱をおこない、歌のメロディーやテンポ、そして歌の基本となる和音の基音を決定する。そして独唱の後もボーゲだけが歌詞を歌いつづけ、ほかの3声部は「ピン・バーン、ピン・バラン、ボン」といった意味のない音節を歌いながら、ボーゲの伴唱をする。これに対し、ア・クンコルドゥでは、ボーゲもしくはバースが歌を開始し、その歌い出し（冒頭部）はア・テノーレと比べると短く、その後、ほかの3声部が加わって和音を生みだし、全員が歌詞をうたいながら調和的に進行していくかたちをとる。

多声部合唱の曲の長さは、世俗歌の場合は一曲がだいたい四、五分程度、宗教歌は八、九分ほどだが、どちらもいくつかのセクションの反復によって構成されている。ア・テノーレの場合、各セクションのあいだの休止はあっても一、二秒ときわめて短く、多くの曲が休みなく連続して歌われる（それによって、強い躍動感や前進力が生まれる）のにたいし、ア・クンコルドゥの場合、各セクションは、ふつう数秒から10数秒の休止によって明確に境界づけられる（それによって、落ち着いた雰囲気や静けさが生まれる）。また、多声部合唱の音楽的枠組みとして重要な意味をもつ和音の点からいえば、ア・テノーレもア・クンコルドゥも、各セクションは基本的に同じ和音ではじまり、同じ和音で終わる。そして、冒頭部と終止部のあいだの部分において、並進行、反進行、斜進行など、さまざまな声の動きが織り交ぜられ、4つの声が平行に並んで進んだり、ぶつかり合ったり、離れて行ったりすることによって、非常にダイナミックで、かつ精緻で荘厳なポリフォニック・コーラスが生みだされる。

サルデーニャの多声部合唱は、こうした強いダイナミズムや荘厳さを特徴とする一方で、4声部それぞれの声をもつ個性もまた、非常に重要な特色といえる。すなわち、最低声部のバースは喉頭にある声帯を極端に絞りこんで出る音を口腔に共鳴させ、一般に「喉声」と呼ばれる独特な声質を意図的に作

り出す。コントラも喉声を出す。喉頭の緊張のさせかたがバスほど強くなく、音域もバスよりも5度程度高い。いわば軽い喉声の特徴としている。またボーゲは、張りのある、よく響く声を用い、それはしばしば鼻音化する。さらに最高声部のメサ・オーゲは、ボーゲよりもいっそう張りつめた、鼻にかかった軽快な声を出す。こうしてユニークで多様な声質をもつ4種類の声絡みあいながら進行していくという点で、サルデーニャの多声部合唱は、音質のポリフォニーと呼ぶこともできるだろう。

ア・テノーレもア・クンコルドゥも、4人の男性がたがいの体が接触するほど接近して輪になり、必ず全員が立って歌う。その際、特にア・テノーレの場合、1人か2人の歌い手が、隣の歌い手の肩に自分の右ひじをおき、手のひらで一方の耳をふさぎながら集中して歌うすがたはよく見られる光景である。この行為によって、自分の声を分離させてよりよく聴きとることができるとともに、他の3人の声ももう一方の耳に響かせて、自分の声とうまく調和させることができるようになる。こうして4人の歌い手が密に接近した立ち姿勢は、必然的に互いの身体を意識させ、身体のあいだや身体のまわりで響く互いの声をみずからの身体をとおして即時的・直接的に聴きとり、感じとることになる。それはきわめて強烈な音響的身体の経験であり、歌い手たちはこの経験によって非常に強い身体的快楽を感じている。その快楽とはすなわち、ともに集い、歌い、互いに声を響かせあって、身体を奥底から揺さぶるようなダイナミックなポリフォニーを生みだすことの喜びにほかならない。

本研究で得られたこれらの研究成果については、2016年度中に出版予定の音響身体論に関する単行本の中の1章として、現在、執筆を進めている。サルデーニャ島のポリフォニック・コーラスは、音響身体論構築のための具体的事例としてきわめて相応しいパフォーマンスであるので、音響身体論をいっそう発展させ、国内外の民族音楽学研究に新たな視点と方向性を与えるために、本研究による成果が大きく貢献することは疑いない。

今後の研究にたいする展望としては、本研究期間中に調査をおこなった村々のなかで、とりわけ大規模な聖母マリアの祝祭を継続的に催している点、宗教歌と世俗歌の両方が併存し、かつそれらのレパートリーも多い点、多声部歌唱の実践にたいする人びとの意識と熱意が非常に高い点などにおいて、中西部の村落、ボルティガリは、多声部合唱に関する研究をより深化させるための格好のフィールドであると考えられる。それゆえ、ボルティガリでの更なる集中的調査は、確実に成果が見込まれるものとして、実施する意義は大きいといえる。

その一方で、サルデーニャ島の多声部合唱には、非常に多くの地域的ヴァリエーション

や差異が存在するため、地理的範囲を拡げて、これまで未調査であったり、深い調査がおこなわれていない村落において調査を実施することもまた、同様に有意義であろう。その候補地としては、サルデーニャ島中部のオロテリヤオルゴソロ、中東部のトルペなどが挙げられる。

5. 主な発表論文等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 陽一 (YAMADA, YOICHI)

京都市立芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：80166743